
ネギま！転生だと！？うっしやあああああ！

エミヤシロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！転生だど！？うつしやああああ！

【Nコード】

N2777M

【作者名】

エミヤシロウ

【あらすじ】

初心者です。まだ慣れていないので、至らない事があるかもしれませんが、呼んでくれれば幸いです。

車に轢かれそうになった子供を助けて死んだ、私、榎本当麻は。薄れ行く意識の中で「ああ、柄でもない事したなあ」何て思って死を受け入れ、気がついたら何か変な所にいました。

そして、神と名乗る奴にいきなり謝られ、ネギまの世界に転生する事に！？うつしやああああああ！！

オタクが織り成す原作ブレイク！！「俺は新世界（ネギまの世界）

の神になる!!」

最初に

始めまして、エミヤシロウと申します。

初心者でまだ余り書き方とかにはなれていませんが、精一杯頑張りますので、感想やアドバイスやご指摘などがありましたら、ぜひとも教えてください。

名前には突っ込まないでください。これがお気に入りのもので。

多分私が書く小説は、キャラ崩壊や、口調が多少違ったりするかも知れませんが、その時は「あ、違うな」見たいな感じでスルーしてください。もしご指摘とかしてくれたら直ぐに直します。ではでは。

プロローグ（前書き）

どうも、作者のエミヤです。

読んでくれたら幸いです。

本編始まります。

ブローグ

あれ？俺、何で飛んでるんだ？……………ああ、そうか。車に轢かれそうになった子供を庇って、変わりに轢かれたのか。

たく、柄でもねえ事しちゃった……。

ドチャ！

俺は重力に従い、地面に叩きつけられた。最早痛みも感じない。

俺が庇った子供が俺の元に近づいてくる……………たくよオ。何泣いてんだよ。男だろ？そんな位でメソメソしてんじゃねえヨ。

俺は血が着いていない手で、子供の頭を撫でてやる。幸い、腕の骨に以上は無かったから普通に動いた。

だけど、もう無理だわ。手に力が入らない……………子供の頭を撫でていた俺の腕は、力なくずるりと下に落ちた。

ああ、瞼が重い……………そろそろ、寝ると……………するか。

こうして、俺の15年と言つ短い生涯は終わりを告げた。

完

「はれ？」

俺は何故か目を覚ました。確か俺は車に轢かれて……………死んだ筈じやなかったけ？

状況が良く分からない俺は、とにかく立ち上がって周りの見る事にした。

黒く、殺風景。そして、その光景に不似合いな幼女が土下座している……………幼女が土下座？

「すいませんでしたああああああ！！！」

「……………は？」

多分今の俺の顔を見れば、かなり間抜けな顔になっているだろう。あつはははは、この子行き成り何言ってますのん？今の僕には理解できない……………。

「わ、私のせいで、死ぬはずの無い貴方を殺してしまいました！！本当にすいません！謝っても許されない事は分かっていますが！すみませんでした！」

……………死ぬ筈が無かった？ははは、俺が？何この子、痛い子？

「あ、あの。貴女は一体……？」

「は、はわわ！しゅみま……すみません！私は貴方方の世界で言う神様です！」

今噛んだよな。しかもはわわって……はわわ軍師ですか？それに、神様って……マジで言ってるのかなこの子は？

「し、信じてください！！私は本当に神様です！」

「はいはい。分かった分かった。んで？その神様（自称）が、俺に何の用ですか？」

「自称じゃないです！私は正真正銘の神様です！」

「はいはい。それで何の用です？」

「実はですね。お詫びに、貴方がある世界に転生させようと思ってるのですが……何処が良いですか？」

………転生………だと？……あれか、アニメとかの世界に行けるあの

転生か？

「マジデスカ!？」

「マジです!だから、何処が良いですか？」

……やはりここは……。

「ネギま!で、お願いします!!」

「分かりました。では、貴方に能力を授けます。何か要望があれば、8つ位まで叶えます」

「8つも!?!んじゃあんじゃあ。アンリミテッド・スレイド・ウェイクスト・ホスピロン無限の剣製と王の財宝アンサーが欲しい。
後、魔力と氣は最高ランクな。それから、投影も使いたいし、答トーカーえを出す者と真祖の吸血鬼と平成ライダー全部になりたい。後は相手の技を見ただけで使える魔眼が欲しい。それだけで良い」

「また何とも……分かりました。では、始めます」

神様が何か唱え始めた途端、俺の体が光り始めた。

力がみなぎってきたあああああああ！！

数分後、俺の体の光が止んだ…… すごい、力があるのが分かる。

「これで力を授ける儀式は終わりました。それでは、楽しい転生ライフをお楽しみください。何か御用がある時は、私が出向きますので、では」

そう言うと、俺の足元に穴が開き、俺は落ちた。

「きiiiiiiiiいやあああああああ！！」

いつてきまあああああああす！

プロローグ（後書き）

つ、疲れました。

やはり難しいですね。

次はオリキャラの設定を書きます。

では。

オリキャラ設定

えのもことうま
榎本当麻

年齢：15歳

身長：168cm

好きなもの：漫画、アニメ、ゲーム、カッコイイやつ（上条さんとかアーチャーとかが主）

嫌いなもの：独断と偏見で物事を決め付ける奴、虫

これは転生前の当麻のプロフィール？です。まあ、すごいアバウトに書いていますが、それはお許しください。次は転生後の設定を書きます。

えのもことうま
榎本当麻

年齢：同じ

身長：同じ

魔力・気：EX

能力：無限の剣製、アンリミテッドブレイドクースゲート オズバヒロン王の財宝、魔眼、不老不死、全平成ライダーの
変身。

種族：吸血鬼。

好きなもの：同じ エヴァンジェリン、茶々丸、ザジ、夕映。

嫌いなもの：同じ

はい、これが転生後の当麻の設定です。では、これにて。

やってきましたネギまの世界！

おっす、俺、榎本当麻だ！

俺、今ネギまの世界に転生したんだ。ただどね、行き成りピンチなの。

へ？何でかって。それはね……俺の目の前に。

「獲物発見！」

「こりゃ息の良さそうな人間じゃの」

俺の目の前に鬼が居ます。つつか刹那と龍宮はどうしたよ！？何で居ない！？

ちい、行き成り戦わないといけないのかよ。……まあ、丁度良い機会だ。それでは実験を開始しよう。俺の力、試させてもらおうか。

トレースオン
「投影開始」

俺は自分の剣の丘に刺さっているある一本の剣を投影する。その名は……。

「鬼切丸……さて、俺は剣術なんてからっきし何でね。スピードと手数で勝負させてもらうぜ!!」

俺は脚に魔力を流し、地面を蹴り瞬動を使い、鬼を切っていく。

先ずは一体。

「むお!?それは鬼の天敵やないか!?なんつつ物もつとるんや!」

「無駄口叩いてる暇は無いぞ?」

再び瞬動を使い、鬼達に見切られないスピードで切り刻んでいく。

二、三。

残り17体。流石に俺の創造では二、三体が限度か。もう少し投影に慣れておかないとヤバイな。すぐに綻びが出来てしまう。

だが。

「まだまだいくぜえええええ！」

関係ナツジングー！壊れるまで使ったやらあ！！

「調子に乗るな若造が！！」

「やつべ！？ am the bone of my sword
……ロー・アイアス熾天覆う七つの円環！！」

俺は手にあった剣を瞬時に解除・償還し、アイアスを償還した。

「ぬお！」

強！！ヒビも一切入らずに、鬼を吹き飛ばした！

「トレースオン
投影開始」

俺は再び鬼切丸を投影し、鬼達を斬滅していく。

「数分後」。

「はあ、はあ、はあ、はあ、……つ、疲れた……」

何とか鬼を全て倒した。やべ、今後の課題は力を使いこなす事より先に、スタミナだな。どんなに強大な魔力や兵装を有していても。体力が無けりや意味が無い。宝の持ち腐れだ。

「さて、何処か野宿出来る所を探そう」

俺は疲れている体に鞭を打ち、立ち上がる。

その時。

キーン！！

俺の頬を何かが掠った。つうか今の音、銃声じゃね？そして、今掠ったのって銃弾じゃね？まさか、たつみーか！？

「動くな。動いたら容赦なく撃つ」

しょうがないので俺は素直に手を上げて動くのを止める。

「ほお。以外に素直じゃないか。それじゃあ、こっちを向いて、顔を見せてもらおうか」

俺は後ろを向き、顔を見せる。

「ふむ。どうやら普通の魔法使いの様だ……だけど。この学園には結界が張られていた筈だ。その結界を避けて通れる筈も無い……一体どういう事だ？」

「……話しても良いが。どうやら君は雇われた身らしい……。ならば、君の雇い主と同伴なら構わない。私としては、そちらの方がよりの現状を詳しく説明してくれる人が多いので助かる」

俺は学園に何とか潜入しようと考えてたから、帰って好都合だ。

「……しょうがない。じゃあ、行くのでしょうか」

そう言うと龍宮はホルスターに拳銃をしまい込み、後ろを向く。

「くつ。さっきの台詞をそのまま返そう。以外に素直なんだな」

「ふつ。褒め言葉として受け取っておくよ」

俺と龍宮は静かに学園に向かっていく。

.....。

「ふおつふおつふお。君が龍宮君が連れてきた、客人かな？」

「まあ、そうなるな。それで、私があの場所……つまり、この学園に入った事についてだったな……」

「ふおつふお。最近の若者はせっかちじゃのお。まあ、君が話したいのなら止めはしないが」

「くつ。このぬらりひょんめ。そう良いながら警戒心丸出しじゃないか。それは、私に恐れをなしていると取るが、良いのか？」

「バレておったか。では、解くとするかの。無駄な争いを避けたいのは、どうやらワシだけじゃない様じゃし」

俺は龍宮に連れられて、すぐに学園長室に連れてこられた。

「この人が私の雇い主だ」

と、無愛想に良い、直ぐに黙り込んでしまった。つまり。

「では、本題に入らしてもらおう。何故私がこの学園に入れたのかと言おう。自分でも分からないんだ。気がついたらあの森に居て、鬼達の標的にされてしまった。……そして、鬼を全て倒した時に、あそこに居るヒットマンに見つかり、連れてこられた」

「ふむ……気がついたら……の。まさか魔法世界ムントウマギクスから来たのかな？」

「いや。私が気を失う前に居た所は紛れも無い日本だ。だが、今私ムントウマギクスが居る日本と、私が居た日本では、何かが違う。それに、魔法世界何て物は存在していなかった」

俺の言葉に、少しばかりしわを寄せるぬらりひょん。

「では、どうやってあそこに居た鬼を倒したんじゃ？」

「魔術を用いて戦った。私の持つ固能力みたいなものだな」

「……そうか。なら、それを少し見せてくれんかの？」

俺は頷くと、直ぐに手を翳し。

トレース オン
「投影開始」

投影を開始する。そして、俺が投影した物は。

「ふお！？そ、それは！」

「知っているのか？これは干将・莫耶。私をもっとも愛用している夫婦剣だ」

「……何故それを君が？」

「だからさっき言っただろ。私の固有能力と。私の能力は、一度見た剣等の類は、全て創れる。だからこれも偽者だ。だが、能力は少し劣るが、本物とさほど変わらない」

ぬらりひょんはかなり驚いた顔をして俺を見ている。

「そうか。では、君は異世界人の線が強くなったの」

「異世界人？もしかして、この世界が平行世界とでも言いたいのかね？」

「まあ、そうなるじゃろつな」

まあ、知ってるんだがな。さて、ここからだ。さあ、食いついて来い。お前は魚だ、俺と言う強い力を持った餌を食らいに来た魚。

お前は絶対この学園に俺を置いておき、悪魔や妖等を倒す手助けをしてもらいたいと思っっているはずだ。さあ、食いつけ。

「そうじゃ！君、しばらくこの学園に働いてみんかの？」

フイイイイイイイツ シュウウウウウウ！！

「……………ふむ。その話、まんざら嘘でもないかもしれないからな。暫くの間なら、貴様に雇われてやるのも悪くは無いな。…………報酬は出るんだろつな？」

「当たり前じゃ、良い値を出そう」

「そうか。では、私は何処に住めば良い？流石に野宿ではキツイの
でね」

「それは安心なさい。教員住宅が確か一室ばかり空いていた筈じ
ゃ。少しの間じゃが、そこで生活なさい。それと、君の仕事なん
じゃが、この学園で教師をしてもらいたいんじゃない？構わんかの？」

「了解した。こちら衣食住と仕事を与えたもらった身だ、贅沢は
言うまい。それに、何か裏があるのдар？」

「まあ……の。それと同時に、学園の警備も頼みたいんじゃない？」

「構わん。だが、その教師の仕事と警備の仕事の報酬は、別々でく
れないかね？」

「良いじゃろう。交渉成立じゃ。では、今地図を持ってくるのでな。
少し待ってくれ。それと、まだ君の名前を聞いてないのじゃが」

そうだった、まだ俺の名前教えてなかった。

「榎本当麻だ。それと、仕事の際はアーチャーと呼んで欲しい」

「分かった。わしは近衛近右衛門じゃ、そうじゃ、当麻君、君、お見合いする気は無いかの？もしあるのならば、うちの孫なんてどうじゃ？」

「くつ。遠慮さてもらうよ」

俺がそう言つと、ぬらりひょんはぶつぶつ言いながら、違う部屋へと消えていった。

「これから仲間だね、榎本先生？」

「あつははは。まだ先生じゃない俺に先生を着けるか。君は変わってるんだな」

「……………へえ、それが貴方の素か。私としては、さっきの喋り方より、そっちの方が好ましいよ」

「そうかい。だけど、あの口調は交渉と戦闘の時にしか使わないか

ら安心してくれ……えっと……」

「龍宮だ。龍宮真名。これから宜しく、榎本先生」

「ああ、宜しくな、龍宮」

こうして、俺は龍宮と仲良くなりました。

それからぬらりひょんを待ち、地図を受け取り、教員住宅に移動し、直ぐに床に着いた。

やってきましたネギまの世界！（後書き）

どうも、作者のエミヤです

「どうも、主人公の榎本当麻です。んで、今回は何で俺を呼んだんだ？」

何となくだ、気にする事は無い。強いて言うなら、初の感想が届きました！

「マジか！？いやっほおおおおい！あつりがとおおおお！」

sakikken様、こんな書き始めたばかりの初心者作者の小説に感想を書いていただき、誠にありがとうございます。これからも更新頑張っていくんで、応援お願いします。

「ありがとうございます！応援宜しく！」

では、また次回でお会いしましょう、エミヤシロウと

「榎本当麻ですた。またな」

早起きは三文の得？ただ暇なだけじゃん（前書き）

更新遅れました。すいません。

何とか書き終わりました。

最近は学際準備で忙しいので、更新が難しいです。まあ、そんな時期に書き始めた私も私ですがね。

では。本編をどうぞ。

早起きは三文の得？ただ暇なだけじゃん

朝、俺は目が覚めてしまったのでベッドから起きる。

昨日は行き成り力を使ったからな、自分の力を調べられなかった。

「トレスオン
同調開始」

| | |
|--------|---------|
| 身長 | 168cm |
| 体重 | 60kg |
| 魔術回路 | 70本正常 |
| リンカーコア | ランクEX正常 |
| アヴァロン | 正常稼働 |

……ん？リンカーコア？何でリンカーコアがあるんだ？つうか、俺デバイス持ってないし、投影では絶対作れないし……謎だ……。

まあ、良いか。考えててもしょうがない。つうか、喉渴いた……あ、そうだった。俺吸血鬼だった。すっかり忘れていた。まあ、血吸わなくても生きていけるし、トマトジュースで何とかなるな。

それよりも、魔術回路が70本って、ありすぎだろう！？士郎でも

こんなに無いぞ!?

そして極め付けがアヴァロンねアヴァロン。不老不死だし、再生能力もあるし、そしてアヴァロンの能力で更に再生するって……それ、超速再生じゃね?

「……ふむ、さて、飯でも食うか」

俺は立ち上がり、キッチンの方に向かう。昨日、教員住宅に向かう途中、コンビ二に寄っておにぎりを買っておいた。

それにしても、今何時だ?

「……まだ朝の五時か……早いな。予定の時間にはまだ全然か……」

おにぎりの封を切り、そのまま口に運ぶ。

……さて、どうしたものか……。

このままでは俺は必ず敵に潰される。まずは戦い方から学んで行かないといけないな。一応相手の動きや技をコピーできる魔眼がある

が、あれは俺の記憶にはリンクしていない。

よって、俺は戦い方に関しては典で素人、と言う訳だ。どうするか、エヴァに頼んで修行をつけて貰おうかな？

ナギの情報をやり、授業料として俺の血を上げる……でも、吸血鬼が吸血鬼の血を吸っても何ともなのかな？

まあ、不死だし、大丈夫だろ。なんくるないさー。無問題モーションタイつと。あ
あ、早くエヴァに会いたい……茶々丸にも会いたい……。

……俺って変態みたいな事言ってるな。まあ、気にしないが。

「さて、飯も食ったし。少し外に出て力の制御でもするか」

俺はゴミを片付け、外に出る。

「ん……はあ。さて、やりますか……結界張ってつと」

一応一払いの結果と修復の術を施しておいた。これで遠慮なくやれる。

「先ずは……」

パチン！

俺は指を鳴らす。

T T T T T T T T T T T T T T T T

ゲート オズバロン
王の財宝を開き、無数の宝具を飛ばす。……すげえ、これが王の財
バロン
宝の力……これはスクナやフェイト戦に使うか。圧倒的過ぎる。
ゲート オフ

「次は、アイ・ギス・イルギス・バルホルス、来れ氷精、闇の精、
クム・オフスクラティオルズト・テンベス務カネリス ニウステンベスタース・オブスクランス
闇を従え、吹雪け、常夜の氷雪、闇の吹雪！」

ドガアアアアア！！

……… 出ちやつたよ……… いやっほおおおい！ エヴァ
と同属の魔法が撃てたあああ！ うううううれえええしい
いいいいいいいいぞおおおおお！！

「んじゃ、今度は。アイ・ギス・イルギス・バルホルス、
ト・シュンボライ 契約に従

・ディアコネイトホ・テュラネウロゴスエビゲネフツタム・カタルセオサ風ギネ由ンファイロウサントーン・ビュー
い我に従え、炎の霸王来れ浄化の炎燃え盛る大剣ほとばしれよソド
ル・カイ・ティオン・ハ・エベツクマンハマルトウス エイスクインタナトウーラニアウルゴシス
ムを焼きし火と硫黄罪ありし者を死の塵に、燃える天空」

ぼおおおおお！

うつしゃ！成功！えっと、これで今俺が使える属性が、闇と氷と炎
…… まだ使っていないのは雷と風と光か……ま、後で良いか。

「次は……いや、もう良いかな。学校行く前に魔力消費しまくった
らあれだし。止めるか」

俺は腕時計を見る。まあ、魔術と魔法二つだから、まだそんなに時
間は経っていない……暇だ。約二時間、何をして潰そう。

そうだ、麻帆良学園を歩こう。

そうと考えれば即実行だ。俺はそのまま学園の中に行ける様に、投
影でスーツを作る。念入りにな。授業中に効果が切れて裸になりた
くないからな。

そして俺はそのスーツを着て、必要な物を持ち、教員住宅を出る。

「ひゃあああああ。生で見ると更にデカイな。こりや感動物だわ……うんうん」

一人で納得しながらまだ誰も居ない麻帆良を歩いている。さながら観光気分ですぜ。

それにしても、今は時期的に何処何だ？ネギはもう居るのか。それともまだ来てないのか……どちらにせよ、ネギより先にエヴァに修行を付けて貰わねば。

マギア・エレベア
闇の魔法は……まあ、一応やり方は分かってるんだが。暴走しないか怖くて怖くて。ある大抵エヴァに戦い方を教わってからやろうと思う。

はあ、修学旅行行きたいな。早くフェイトと戦いてえ！……まあ、今の俺では一捻りにされるだろうがな。

修行頑張ろう。だから、なんとしてもエヴァを説得しなければ！そうだな、もし2-Aの副担になれば、挨拶しに行くついでに言うてみよう。

まあ、なればの話なんだがな。

「そつれにしても。静かだな。これが後一時間したら人で溢れかえるなんて創造出来ないわ」

このゆったりとした時間が流れるの、良いねえ。俺こついうの大好きよ。お、そうだ。世界樹の方にはまだ行ってなかったな。行ってみよう。

俺は小走りで世界樹に向かった。

古菲サイド

「ふっ！ほっ！はっ！」

今日も良い天気ネ。こんな時はやはり修行に限るヨ。

「ふっ！はっ！はあああ！」

私は一通り型を確認シ、何処が駄目ナノが見つけれ。そんな時。

パチパチパチパチ。

何処からか拍手が聞こえてきた。

当麻サイド

俺は今、世界樹に来ている。大きな木が一本あり、何とも言えない貫禄を放っているのが分かる。その近くで、俺はある人物を見つける。

「ふっ！ほっ！はっ！」

「あれは……古菲か……。それにしても、中国拳法か……。少し悪いが、覚えさせてもらうぜ。魔眼発動」

俺は直ぐに魔眼を発動し、少しだが、古菲の動きを見る……。よし、少しばかりだが、覚えたぞ。後で使ってみるか。

そしてそこで古菲の動きが止まったので、思わず拍手をしてしまう。

古菲がこちらを向く。

「君、誰アルか？ここらでは見ない顔アル」

「ああ、俺は榎本当麻。今日から麻帆良の教師として働くことになった者だ。宜しく頼む」

「そうだったアルカ。私は古菲ネ。宜しくアルヨ」

「古……菲……。名前からして君は中国人か？」

「そうネ。私は中国から来たネ。強い男を求めて」

「なるほど。君は強い人と戦いたいのか。でも、君は女の子何だから、余り無茶はいかんぞ？」

俺の言葉に、少しだけムツとする古菲。

「勝負に男も女も関係ないアル。それは明らかに侵害ネ」

「これはすまん。気分を害してしまったか。それは俺の言葉足らずだ。花嫁前の体何だから、余り無茶をするなど言っただけで。誰も戦うなどとは言っていない。勝負に男も女も子供も関係ない。戦いは、己との戦い。自分より強い敵と戦い、それに勝てた時の喜びは計り知れない。己が鍛え上げた技、拳、足……己が超えなければならぬ壁を越えるには、強い者と戦う事もまた然り。安心したまえ、

俺は差別なんてものはない」

「……………初めてネ。男の人にそう言われたのハ」

「へえ、そうなのか。ま、頑張りたまえ。俺は影ながら応援させてもらうよ。古菲」

そう言って俺は背を向けて、世界樹を後にする。

古菲サイド

初めは馬鹿にされたのかと思ったけど、それはどうやら私の感違いだたネ。この男、中々分かってるヨ。それに、少しばかりあの男からは普通じゃない空気が感じられタ。一度、手合わせ願いたいアル。

私はあの男、当麻が去ってから、また型を確認する。

今日は、何て良い日ネ。これは今日一日楽しみアル。

当麻サイド

「今は7時か……まだ時間あるよ。暇だな……もうほとんど見たい所は見たし。やること無くなっちまった。暇だあ……」

でも、生で古菲見れたから良いか。さて、次は何処をほつつき歩こうかな。予定までまだ30分あるし。

「……………しょうがない、少し早いが、行くかな」

俺は麻帆良学園を目指し、歩き出した。

「ぬ〜ら〜り〜ひょ〜ん。来てやったぜ〜」

ドンドンドンドンドンドンドンドンドン……！

……………しーん。

反応無しか………だったら。

「俺の最高の必殺技でこの学園諸共「す、すまん！入ってきて良いぞ！だから止めとくれ！」……………ちっ……………失礼する」

俺はドアを開け、学園長室に入る。

「今舌打ちせんかったかの？」

「何の事やらサッパリです」

「……………ま、まあ良いじゃろう。それより、予定の時間よりも早いのだが、どうした？」

「いや、暇だから早く来た。別に早く来ても良いだろ。予定に早く来て悪い事は無いんだからよ」

「まあそつじやが……………いや、止そう。君に何を言っても聞かなそつじやし」

あら、それは侵害だな。俺はちゃんと言う事聞け。

「んで。俺は何処のクラスの教師になるんだ？」

「まあそつ慌てるでない。君には2・Aの副担任になって欲しいんじゃない」

「副担に？誰の？」

「まだ担任の先生は来てないんです。一応この部屋に寄るようには連絡してある。それと、今日の夜10時に世界樹の広場に来とくれ。君の実力を確かめたいと、魔法先生皆の要望じゃ」

「めんどくせえ。俺の実力ならこの学園に居る魔法使い程度なら瞬殺だよ。それで、相手は誰なんだ？」

「その相手なんじゃが……」

その時。

コンコン。

「失礼します」

「おお、高畑先生。やっと来たかの」

「やっとって。私は一応時間通りに来たんですけどね」

そう言いながら苦笑するタカミチ。おお、渋いねえ。

「おや、君は？」

「紹介しよう。昨日この麻帆良にやって来た」

「榎本当麻だ。宜しく頼む。えっと……」

「タカミチだ。タカミチ・Ｔ・高畑。気軽にタカミチで良いよ」

「そうか。だったら俺も当麻で良いぜタカミチ」

タカミチが手を差し出してきたので、俺はタカミチの手を握り、握手する。

「それで、当麻君には高畑先生のクラスの副担任をやってもらいたい。そして、今夜戦う相手は……」

「タカミチって事か」

俺はタカミチを見ながら、少し引きつつた笑みを浮かべる。勝てねえ……どうするよおい。魔法使うか？それともランクSの宝具を投影して物量と質量で攻めるか……どちらにせよ、今の俺では固有結界出さないと勝てねえ……orz

「ははは、お手柔らかに頼むよ。当麻君」

いや、お手柔らかに頼みたいのはこっちだつつの。たく、とんだバトルジャンキー戦闘狂だこいつは。でも、本当にマジでどないしよう……タカミチの戦い方は分かってるが……拳のスピードを捕らえられるかが問題だな。

居合いの類だけど、明らかに剣の速さを越している。居合い拳だっけか？それに、咸封法……確か究極技法^{アルテマ、アート}だっけか。気と魔力を合成して、肉体強化・加速強化・物理防御・魔法防御・耐熱・耐寒etc。

えっと、一言だけ言いたい。……それ、何てチート？

まあ、良いか。何とかなる。幸い。さっき古菲の中国拳法をコピーしたし、もしそれが駄目でも。タカミチの動き、技をコピーすれば良いか。

「了解した。地獄に落ちろ、ぬらりひょん」

俺は最後の方は小声で言ってやった。多分聞こえていないはずだ、多分……………。

早起きは三文の得？ただ暇なだけじゃん（後書き）

どうも、作者のエミヤと。

「主人公の当麻だ。それで、今回も俺を呼んだ理由は？」

感想を返してもらおうかと思って。

「また感想来たのかよ！？ここの方々は優しいな」

だな、そんな事より、感想返してくれ。

「ああ、だな。 贄殿遮那樣、感想ありがとうございます。まあ、それは作者の頑張り次第ですね。もしかしたら失踪とかもありえますから」

縁起でも無い事を言うな。私はこれでも頑張っている……筈だ。

「心配になってきた。まあ、今回の感想はこれだけなので。また次回、お会いしましょう。まあ、感想が来たら話ですがね。それでは、また今度」

教師って疲れるな。戦闘は楽しいです……（前書き）

お久しぶりです。作者のエミヤです。

すいませんでした！学祭が終わり次第更新しようと思ってはいたのですが、期末テストの事をすっかり忘れていたので、急遽勉強に切り替わりました。

本当に申し訳ありませんでした！

それでは、本編をお楽しみください。

教師って疲れるな。戦闘は楽しいです……

「こつちだ、当麻君」

俺は今、タカミチの後ろに着いて行き、2 - Aのクラスを目指している。

さてと、どうしましょう。魔力は一応抑えてるから、一般人と然程変わらないが。氣は無理だった。あれは魔力と違い、外側の力ではなく、内側の力だったので、抑えられない。

俺の氣は、刹那や楓、古菲の更に上を行くからな。

まあ、刹那は問題ではない。龍宮が話しているだろう。同じ部屋だし。後は……問題無いか。エヴァは怪しむだろうが、古菲みたいに一般人が弛まない努力をして力を入れた程度にしか思わないかもしれないしな。

お、考え事していたら着いた様だ。

「それじゃあ行こうか。当麻先生」

当麻先生……か。本当、タカミチは教師の鑑だな。ちゃんとプライベートと仕事の切り替えが出来ている。憧れるねえ。

俺はタカミチの後に続き、教室に入って行った。

ざわざわ！きやつ！きやつ！あははははは！

騒がしい……。どんだけ元気なんだよこいつらは。俺が中学生の頃は、こんなに無駄に元気じゃなかったぞ。つうか、しらふでこれとか。こいつらに酒入ったらどんだけどやかましいんだ？

ああ、修学旅行で酒入ってたな。あれは酷い事件だったね。等とボケている暇じゃないな。

「はい、静かにしてくれないかな？これからHRを始めるから、落ち着こうか」

シーーーーーーン。

すげえ、あんなにうるさかったのに、一瞬で静かになった……あ、明日菜だ。恋する乙女の目だねえ。本当、オジコンだな。

「まず、今日からこのクラスの副担任になった榎本当麻先生だ。当麻先生、自己紹介」

「あ、ああ。えっと、始めまして。今日からこのクラスの副担任になりました榎本当麻です。主に教えるのは世界史と数学かな。それと、タカミチ先生が忙しい時には、たまに英語も教えるから。宜しくお願いします」

ここで一礼。

「「「「「.....」」」」」

あれ？俺もしかしてスベッた？でも、普通に挨拶したただけだよ？本当だよ？

「「「「「.....か」」」」」

か？かめはめ波か？

「「「「「.....カツコイイ！」」」」」

「「「「「.....」」」」」

そう言いながら、皆は俺の所に集まってくる。

「何処から来たんですか？」

「年はいくつですか？」

「彼女とか居ます？」

くっ。これはこれは、怒涛の質問攻めだな。どう切り抜けよう。俺はこいつらの勢いに蹴落とされかけた。だが。

バン！！

「いい加減になさい！！榎本先生が困っているではありませんか！！はい、皆さん席に戻ってください」

いいんちよの言葉に、皆は自分の席に戻る。

「あ、ありがとう。えっと……」

「雪広あやかですわ。榎本先生」

「雪広さん、ありがとう。俺では対処仕切れなかった。感謝する」

「いえいえ。委員長としては当然の事です」

そう言つて、おほほと笑ういいんちよ。この子も元気だな。

つつか、俺の何処がカッコいいんだろうか？前世では一回ももてた事も無いのに、不思議だ。

まあ、良いか。めんどくさいし、考えるのは予想。

「えっと、それでは。HRを始めます」

それから俺はちゃんと仕事をこなし、夕方まで働きましたとさ。

「ふう、教師は本当に疲れる職業だな。に、してもだ。今日エヴァの席見たけど、居なかったな。あやつめ、サボりおったな。後で挨拶し行つちやる」

俺はぶつぶつ言いながら外を歩いている。これって完全に危ない人だよな俺。自重自重っと。

「つつか俺、相坂さよ見えてたよ。お化け見えてたよ。あいつも何か手振ってたから皆が見てない所で手振り返しちまったよ。何か泣きそうな笑顔で俺を見てたよ。可愛かったぜちきしょおおおおお！！！」

「何を叫んでいるんだい？榎本先生」

「おおぅ！？……な、何だ、龍宮か。驚かすなよ」

俺の後ろにいつの間にか立っていたよ。やべ、完全に痛い子って思われた。

「本当、貴方は面白い人だな」

「それは褒めてるのかな？それとも貶しているのかな？」

「ああ、どっちだと思えます？」

あはは、完全に俺遊ばれてるよね。完全に遊ばれてるよね？大事な事だから二回言いました。

「それで、君から話し掛けてくるって事は、何か俺に用でもあるのかな？」

「察しが良いですね。これから2・Aに来てください。面白い事がありますよ」

そう言っで龍宮は歩き出す。仕方がないので俺は龍宮を追う。

「2・Aで一体何をやるんだ？」

「それは着いてからの楽しさ」

そう言っで少しばかり不適な笑みを浮かべるたつみー、おお怖い怖い。俺、帰っても良いかな？

「所で、いつの間にそんな俺と親しくなつた訳？」

「昨日の時点で、じゃないですか？」

「おいおい、まだ一日も経ってないのか？」

「昨日から同じ仲間ですから、別に良いじゃないですか」

「まあ、こっちとしては早めに友人とか作りたかったけどよあ」

「なら、良いじゃないですか」

ニコツと笑って再び前を見て歩き出すたつみ。何か流された感があるんだが、そこら辺どうよ？等と考えていたら、もう2・Aのクラスの前に来てしまったというwwwちょwwwテラ早すwww結構距離あったのに直ぐ着くとかwww

「さあ、入ってください、榎本先生？」

「くつ、君には似合っていないな、その口調は。自然体で良いぞ？」

「……ふふ、なら、そうさせて貰おうかな。当麻先生」

……何だろう。漫画で読んでた時の龍宮と、今の龍宮では、感じが全然違う。何故だろう。

あ、そうだ。教室入らないと。俺はドアを開け、教室に入る。

パンパンパンパンパン！！

「……………ようこそ！！当麻先生！！」……………

「……………」

今自分の顔を鏡で見れば、速攻爆笑出来る顔になってるだろうな。

「これはこれは。一本取られた。まさか赴任した日にいきなりこんなサプライズがあるとは、思いもよらなかったよ」

そう、素直な感想を述べ。俺は暫しこの楽しい歓迎会を堪能した。

に、してもだ。五月の作った飯うめえ！！前世でも食ったことの無い

上手さだぜ！！

チャオバオス

今度超包子行こうつと。

後、朝倉にインタビューされ、いいんちょにはお近づきの印に銅像を貰った。実際いらなと思ったが、結構立派に出来たので貰っておく事にした。

あ、そうそう。ザジと少しお話出来たよ

「こんにちは」

「……………コクリ」

「そんな端に居ないで、もっと前に行ったら？」

「……………ここが好きだから……………」

はいーしゅーりょーうー！

うん！俺としては凄い満足だね！！でも、ザジが魔法関係者と知った時は、発狂するかと思ったぜ。でも、語尾のぽには萌えたので良しとする！！

そして今現在。俺はエヴァちんの家の前に立っている。何故かって？勿論 o h a n a s h i ！もとい、お話をしに来たんだよ。決してなのはのお話（砲撃）では無いので、悪しからず。

ピンポン。

とりまチャームを押す。

「はい、どちら様でしょうか？」

「こんにちは。俺は今日2 - Aのクラスの副担任になった榎本当麻です。えっと、茶々丸さんですね？一応エヴァさんに挨拶に来たのですが」

「マスターなら奥に居ますので。どうぞお上がりください」

「それじゃあ。失礼しますね」

俺は茶々丸の言葉に甘え、中に入る事にした。

「ん？誰だそいつは」

茶々丸に着いて行くと、エヴァちゃんがお茶を飲んでくつろいでいた。この野郎、授業でやがれよ。

「こんにちは。エヴァンジェリンさん。俺は今日2 - Aのクラスに副担任としてやって来た榎本当麻です。それとも、こう呼んだ方が

良かったですか？『闇の福音』さん？」
ダークエヴァンジェル

「……………ほう。じじいが平行世界から来た奴が副担になるとは聞いていたが……………もしかや貴様嘘をついていたのか？」

「いや。平行世界から来たのは本当さ。それに、何故君の正体を知っているのかは、企業秘密という事で」

「ふん！それで、わざわざ私の家にまで来たんだ。よもや、ただ挨拶に来ただけではないだろう」

「さっすが、良く分かってるね。お願いがあって来たんだ。それと、耳寄りの情報も着いてくるぞ？」

「耳寄りの情報？じゃあ先ず、その耳寄りの情報とやらを聞かせてもらおうか？もしつまらん情報だったら、貴様の血を一滴も残らず吸ってやるっ」

おお、怖い怖い。でも、エヴァちゃんに血を吸われるのも悪くは無いかもしれん。でも、全部は吸われたくないな。

「はい、そのまえに疑問があります。真祖の吸血鬼が同じ真祖の吸

血鬼の血を飲む事は可能なんでしょうかエヴァ先生！」

「誰が先生だ！別に何とも無いが……私自身も良く分からん。吸った事もないし……って、まさか貴様」

「察しの通りだ。俺も吸血鬼さ。真祖のな。エヴァの仲間当たるのかな？ほら、キバあるつしょ？」

俺は口を開き、歯を見せる。

「……………そうか。貴様も同類という事か。それでは、血を幾ら吸った所で、死ぬ事は無いのか」

うっは、まさかの殺す気まんまん！？やっべえ、真祖じゃなかったらガチで殺されてたな俺。

「んじゃあ。情報提供と行きますか。サウザンドマスターの噂は知ってるか？」

「ああ、知っている。奴は死んだ。皆口々にそう言っているしな。全く、私にこんな忌々しい呪いを掛けおって……それがどうした」

「そのサウザンドマスターが生きていると言っただけ……どうする？」

ガタッ！

エヴァちゃんが勢い良く立ち上がる。

「ありえん！奴は死んだ！行方も分かっていない！何故貴様がそんな事を言える！！」

「落ち着けよエヴァ。これはガセネタじゃない。来年、サウザンドマスターの息子。ネギ・スプリングフィールドがこの学校に修行をしにやって来る。そいつが持っている杖は、サウザンドマスター、ナギ・スプリングフィールドが使っていた杖だ」

「……………それは……………本当か？」

「何だっただら。学園長に聞いてみれば？ネギをこの学園に修行をさせる事は、裏であの妖怪が手引きしてる事だし」

「そうか……………ふっ……………ふふふ……………はっはっはっはっはっはっ！殺しても死なん馬鹿だとは思ってはいたが！……………はあ、それで？お前が頼みたい事とは何だ？」

「俺が頼みたいのは……修行を付けてもらいたい」

「私に修行を？何故だ？」

「一応言つとくが。俺にも魔力が存在する。今は抑えているがな。だけど、幾ら量が膨大でも、使い方を知らなければただの宝の持ち腐れだ。だから力の使い方、そして戦い方を教わりたい。正直言つて、俺個人のスキルだけではちとキツイ戦いも起こるかもしれない。だから頼む！」

「……………私は悪の魔法使いだぞ？そんな私に魔法を教わりたいなど」

「悪の魔法使い？んなもん関係ねえよ。つつかその前に、誰が正義の魔法使いに俺は習いたいつて言った？悪の魔法使いもだ。俺はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルという一人の人間に頼んでいるんだ」

この言葉に、エヴァちゃんは固まる……………。

「……………はっはっはっはっはっ！！吸血鬼である私を人間と言うか。面白……………気に入った。良いだろう。我が同胞よ。ただし、途中で逃げる事はするなよ」

「モチのロンロンですよ。ありがとなエヴァ」

「礼などいらん。それじゃあ、授業料として、血は頂くからな？」

「へいへい。それじゃあ、俺はこれで失礼するよ。んじやな」

「ああ。修行をしたかったらいつでも来い。毎日来てくれても構わんぞ？」

「了解。あ、そうだ。今日の夜。タカミチと戦う事になってるから。見に来たかったら来いよ。エヴァちゃん。今日の授業も歓迎会も来なかったし、流石にこれは来るよな？」

「ああ。お前の今の戦力を知っておきたいしな。行かせてもらっよ」

「そうか。今度こそ、それじゃあな」

俺はエヴァちゃんの家を後にした。

それからコンビニで弁当を買い、教員住宅に戻り、飯をかつ込み時間待つ。

それから時間が来たので、世界樹の広場に移動する。

「ふおふおふお。来たかの、当麻君」

「こんばんみーっす。で？こんな大勢の前で戦えと？」

「何じゃ。緊張しとるのか？」

「まあ、それもありますけどね。それで、タカミチは？」

「もうそこに立って、準備万端じゃ」

学園長が指差す方向を見ると、タバコを加えながらニコツとしている戦闘狂が立っておられました。

「当麻君の方は、準備は良いかの？」

「……………トレース 投影、オン 開始」

カチャ。

俺は干将・莫耶を投影し、タカミチの所に行く。
至る所で。転送系の魔法か！？何て言ってたが、気にしない方向で
行く。

「準備出来たぞ？」

「分かった……それでは……」

「宜しく頼みよ。当麻君」

「お手柔らかに」

「……………始め!!」

最初に前に出たのが俺。タカミチの居合い拳は中距離系の攻撃。だ
ったら最初から相手の土俵なんか立ってないで、自分の土俵で戦
ったほうが良い。

だけど、移動中にすかさずタカミチは攻撃を仕掛けてくる。

キン!!

「ぐっ！」

「これを受けるか……見えてるのかい？」

「ご冗談を……勘だよんなもん。おらあ！」

ボツボツボツボツ！！

空気を切る音が聞こえる。俺はそれにあわせ、双剣で受け流す。

キン！キン！キン！バキ！

「ガッ！！！」

一発受けきれず、顔面にヒットしてしまう。危つく意識が飛びそうになった。だけど……。

「これなら！！！」

俺は後ろに下がり、干将・莫耶を投げる。

「何のつもりだい？こんな物」

ブロックン ファンタズム
「壊れた幻想！」

ドカン！！

干将・莫耶が爆発する。
よし、次だ。

トレース・オン
「投影開始……タカミチ……本気だしてないだろ？」

煙で何も見えないが、タカミチの気配は今だ近在。気を失ってはいないだろう。

「気づいていたのかい？」

「当たり前だ。そんな様子見みたいな感じで攻撃さちやあ、気づかない奴は居ない。……次の一撃は本気を出さないとやばいぞ。I am the bone of my sword《我が骨子は捻れ狂う》」

俺は偽・螺旋剣をいつでも射る用意をする。一応手加減はしている。
死にはしない。

「どうやらその様だね。左手に「魔力」……右手に「氣」……合成
！」

「……………偽・螺旋剣！！」

「はああああ！！」

俺の弓と、タカミチの超居合い拳。つつか咸卦法の状態で殴ってくる。何か物凄い極太レーザーみたいなんだが。

ガガガガガガガガガ！！

そして、俺の放った偽・螺旋剣とタカミチの超居合い拳がぶつかり
合い、大きな爆発を生み、煙が再び立ち込める。

俺はその瞬間を狙い、気配を消し、タカミチに近づき。干将・莫耶
を投影し、タカミチの喉元に突きつける。

「さあ。言う事は？」

「……………参りました」

こうして、タカミチとの試合は。俺の勝ちと言う形で終わりを告げた。

教師って疲れるな。戦闘は楽しいです……（後書き）

こんばんは、エミヤです。感想を返しますね。

大根好き様、感想ありがとうございます。

まあ、そう思われても仕方ないですよ。初心者だとか、そんな安易な言葉を使って逃げるつもりありませんし。言い訳をするつもりありません。

不快な気持ちにさしたのであれば謝ります。すみませんでした。

あれから少し自分の小説を読み返しましたが、結構ありえない所もありました。まあ、そんな事言っと。自分の小説を、自分で否定してるかもしれません。

タイトルにつきましては……ネーミングセンスのかけらもありませんね。

本当に申し訳ありませんでした。

次に、霊剣荒鷹様。感想ありがとうございます。

まあ、似てしまいますね（苦笑）。

でも、まだ書き始めたばかりなので、自分でも展開が決まっていないう風に書けば良いのか分かっていない点もあるので、何とも言えませんね。

面白いつて思われるように、頑張っていくしますので、宜しく願います。

えっと、次回は……出来るだけ早く上げます。

では、今回はこれにて失敬です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2777m/>

ネギま！転生だと！？うっしやあああああ！

2010年10月14日23時08分発行